

人と森の調和と可能性

荒れた森だから人が来る？

森と踊る株式会社 代表取締役 三木 一弥

ここでは、大胆に自分の体験を通じて、森の持っている可能性と、この現在の社会の持っている可能性、言い換えると社会を構成する一人ひとりの人の持っている可能性について記したいと思う。ひとつ断っておくことがある。私はただの普通の人で特別な人ではなく、さらに森林や林業や社会について特別深い知識を持ち合わせていない、よく分かっていない人の一人である。その上で、一素人木こりの体験と妄想または観ている夢としてお読みいただければ幸いである。そして共感や関心が生まれた方がいらしたら、この先の話を是非一緒に話し紡ぎたいので、気軽にご連絡をいただけるきっかけになればさらに喜びである。

1. 木こりになっちゃった

2013年11月、ひよんな事で森と出会った。一本の木を間伐する体験だった。「えっ、木ってこんなにゆっくり倒れるの～！？」と驚きと共に切ったばかりの倒れ行く木を見つめていたら、次の瞬間、体で地響きを感じた。そして見上げるとぽっかりと木々の間に空が見えた。思い返せば、間違いなくこの体験が森で仕事をする大きなきっかけの一つになっていると思う。この「思う」としか言えないのが森の不思議な力、なんだか自分の思考を超えて呼び寄せられた感覚で、どの瞬間に森で働こうという決意が自分の中で生まれたのかは未だに定かでない。自分の内側をいくら観ても源流は不明だ。

そして、驚いたことに、わずか2ヵ月足らずの2013年末には20年勤め



2013年11月10日初めて木を切り倒した。



記念すべき木材加工初挑戦姿！刃先はかなりビビりながらも、不思議な充足感を感じた。

た会社を退社していた。今振り返っても何故そんな大胆な行動をあの時生み出したのかは、自分の人生の七不思議である。思い当たる支流はその森との出会いの後にも先にもいくつもあるが、直接的な源は分からない。

冒頭からこんな「分からない」ことばかりを書くのは、木こりになって様々な事を実際に自分が体験している中で、この「分からない」こそ、この現代において大きな可能性であり重要なカギなのではないかと感じているからである。

今思い起こせば、木こりへの入口は、「木こりになる。森で働く」という思いがどこかで自分の中に生まれ、それを実際に言葉として人に伝え始めた所から始まった。当然、現実には「山なし」「経験なし」「知識なし」「道具なし」。もちろん「お客さんもなし」。無い無いづくしからのスタートであった。ただあったのは、「森というのは可能性なんじゃないか？」という得ても知れない強い期待と直感。そして、何か、思い切って自分で歩みだした高揚感。それと、もちろん、現実を顧みての、何が起こるのか、何をしていったらいいのか、そもそも食っていけるのか？といった、分からないことへの不安と恐れだった。

案の定、100人以上の人から、「貸せる山なんてない、そんな間伐方法は

許可できない」と断られた。それでも私の中にある森の可能性を信じ、進み続けて、今もまだその過程にある。ここから先は、私がこの3年間、「森は可能性の宝庫ではないか？」と芽生えた問いからスタートし、まず「森を都会に、都会の人を森に、共に分かち合う」をテーマに創ってきた活動と、実際に体感してきた森の可能性についてお伝えしたい。

2. きらめ樹間伐 ～森に光がさす、心の森に光がさす～

私達が取っている間伐の形態は、「きらめ樹間伐」という。あまり知られていない一風変わった間伐方法なので、まずは、きらめ樹間伐とはそもそも何か、ということからご説明したい。

きらめ樹間伐とは、皮むき間伐の愛称で、杉やヒノキの皮（表皮から形成層）を剥く間伐方法だ。皮を剥いた木は、半年から一年ほどで葉が枯れ落ち、枝は葉が落ちて軽くなることで縮こまり、林床に差し込む光を遮るものはほぼ幹を残して、なくなる。そして、一年を経過したころから、森に残す木の生長を観察しながら、皮を剥いて乾燥した木を伐木し利用していく。

その伐木、搬出に関しても、きらめ樹間伐が持っている特徴とメリットがある。それは、木の重さが軽くなることだ。皮を剥いた木は、立木の状態で一年程の間に乾燥し、含水率が約20～30%にまで下がる。つまりは重さがずいぶん軽くなるため、搬出時に2m程度に玉切りすると、女性でも担いで土場まで搬出でき、基本的には大型重機を必要としない。大掛かりな道も必要なく、化石燃料も極力使用せず、汗さえかけば木材が山から搬出できるというのは、本当に驚くべき特徴である。誰



丸太を担ぐ森と踊る女性メンバー。初めてでも楽々。

でもやる気さえあれば少ない初期投資で始めることができるのだ。

また、皮を剥いた木は、立ち枯れの期間、残す木の成長が進むまで生木と同様にお互いを支え合う役目を果たす。それによって、長年放置され暗く密集して木が倒れやすくなっている線香林でも、伐木による二次倒壊を起こすことなく林床の回復を図ることができる。光が林床に届き下草や落葉広葉樹などが生育するようになれば、今の線香林も、生物多様性や土砂流出防止などの公益的機能を高めてくれる針広混交林として育てていくことができるのである。



わずか数メートルしか離れていない、手を入れていない森（左）と過去2年間できらめ樹・伐木を行った森（右）。同日同時刻撮影でも、手を入れた森は光が差し込み明るい。

まだあまり知られた方法ではなく、この手法で間伐をやらせてくれる山主さんを探すのには相当手こずった。2014年になってようやく2人の山主さんから、テスト的にやってみたらとお声掛けいただいた。季節は晩夏で、木の皮を剥くことができるぎりぎりの時期。かつ、よく分からない方法だからと限定的なエリアでの条件付きで、木の本数としては僅か30本弱の間伐だった。

それから、3シーズン目となった、2016年。5月～9月中旬までの約4か月半で、延べ420人の市民と共に、約3haの森できらめ樹間伐を実施した。2014年から3年間の延べ数は、約620人、約4haである。

また、私がこのきらめ樹間伐を教わったNPO森の蘇りの皆さんの努力もあり、今、日本の各地できらめ樹間伐を通じた素人の手による森づくりが広がり始めている。これは、ただボランティアとしての森林整備活動ではなく、間伐材を利活用したり、森の空間を活用したりして、その地の特質を生かし

た生業を伴った活動として広まり始めているのだ。

既にお察しの通り、材を利用するまで二度も森に入る必要があり、手間も余計にかかるため、効率は悪い。にもかかわらず、きらめ樹間伐による森づくりはなぜこんなにも素人から広がり始めているのか。その理由は、上述の伐木・搬出のメ



夢中で木の皮を剥く子供たち。その表情はイキイキと煌めいている。

リットに加え、何よりも、皮を剥くというきらめ樹間伐自体の楽しさが持つ魅力にある。

きらめ樹間伐の楽しさはなんだろう？と参加者の声に耳を澄ませると、「美しい〜!」、「木って生きてるんだ!」、「こんなにすると皮が剥けるんだ〜」という言葉が聴こえてくる。木の皮を自分で剥き、みずみずしく象牙のような白い木肌が現れた時の、想像だに wasn't した美しさ、みずみずしさ、生きているという実感、そして思いもよらぬ未知との遭遇、躍動と美しさとの出会いみたいなものがそこにはある。つまりは思いもよらなかった、「分からなかった」事への意外な発見。そして、その発見が美しい、楽しい、という方向にある事が人々を惹きつけているのではないかと感じている。一般の人々の中から森仕事の担い手を喜んで引き受ける人が増えていく、そんな可能性がここにあるのだ。そして、森についても改めて、「分からないこと」に気付くことがいっぱいある、でもどこか可能性とを感じる事に出会う宝庫、ひいては楽しさに出会う豊かな場所として見えてくるのである。

3. 森を都会に、都会の人を森に ～間引いた命に、また新しい命を～

ここまでは、きらめ樹間伐とその可能性について説明してきた。しかし、私たちの仕事は、一般市民と一緒に木の皮を剥くことだけでは終わらない。きらめ樹間伐は、「森を都会に」と「都会の人を森に」をつなぐキーとなる

活動だ。では、「森を都会に」「都会の人を森に」というのは何なのか？

私たちがどれだけ沢山の人と一緒に広大な面積の木をどれだけ剥いても、それだけでは1銭もお金にはならない。山主さんからは施業費はもらわず、代わりに、間引いた木材は私たちが生きるために頂くという形を取っているからだ。私たちは間伐した木を単なる資源としてとらえるのではなく、新しい命を生き続ける存在として活かしていくという観点にたち、形を変え新しい命を創るかのように、自分達で製材し、自分達で木工し、時には施工する。自分たちの技量や設備が足りない場合には、その分野で長けた方々と一緒に協業するスタイルを取っている。都会のいたるところに、森からやってきた木を使った住宅や、店舗、オフィスが生まれている。「森を都会へ」だ。こうして間引いた木にも新しい命を与え利活用することで、私たち自身も生かされている。結果的に分業化がかなり進んだ林業分野で小さくても一通貫の顔の見える6次産業化にもなっている。

また、人の心に森を育む「心の森事業」として、都会での森のイベントや、企業でのファシリテーション、研修、コーチング等も行っている。森について何も知らない人と共に「森って何？」について対話する機会も多い。その中からも、森に惹かれて実際にやってくる人達がいる。森での間伐体験などを通じて一緒に森に入る事で、森や木についての知識も体験も、分からないまま行動する中で少しずつ学んで行く。知れば知るほど、あまりにも知らない領域の多さを思い知らされるが、同時に様々な興味とインスピレーション



2016年5月開催のきらめ樹フェスにて、森の話に真剣な表情で耳を傾ける参加者達。

が湧いてくるのを体験する人が多い。私自身、今振り返ってみても知らなかったからできたことも多い。「都会の人を森へ」。それによって人が得るものは計り知れない。

実際に3年間やってきた体験として手ごたえを感じているのは、「素人でも、森の為に何かをしたい。で

できれば役に立ちたい。多くのものを森から頂いているそんな森に何か返したい」と思っている人は多いということだ。そして、きらめ樹間伐は、それらの「想いはあれど設備や技量がなく手をこまねいている」沢山の方たちの誰でもが手をだす（＝自分を森に分かち合い、森からも分かち合われる）ことができる大きな可能性として存在しているのである。それらの方々に、きらめ樹間伐を通じてその機会を提供することができれば、そこに価値を見出せば、お互いが Win-Win を創り出せる。森も含めたら、近江商人の言葉「三方良し」の森版が組み立てられるのではないか？今はそんなことを考えている。

4. 森の生み出す巡りと恵 ～もたらしてくれたモノ・コト～

まだ私自身やり始めて3年の期間なので結論付けるにはまだ尚早であろうが、森に対する見方、放置人工林に対する見方、これからの社会に求められるモノ・コトの見方に対して、今までの世界観や価値観の延長線上では考えられない、全く違った新しい可能性が生まれだしているのではないかと感じる。

今、一緒に「森と踊る株式会社」で働いている仲間の一人は、私たちが活動している森の山主だ。元々は、山主と間伐請負の関係としてスタートとした。それがいつの間にか、彼自身も森の可能性に魅せられ、一緒に森を育み、会社を経営する仲になった。出会った当時の彼が、「そんな荒れた森に参加費まで払って間伐しにくるようなご奇特な方はいないよ！！」「お金払ったってなかなかやり手がない仕事に…」と語っていたのを今でも鮮明に覚えている。また、高尾と奥多摩の森で1日ずつ開催した「東京きらめ樹フェス2016」では、その2日間だけで約300人の方々が実際に森に来て、きらめ樹間伐と一緒に楽しんだ。

確かに、「荒れた森になんか人が来るわけではない！！」というのが、普通に出てくる発想かもしれない。でも、実は、「荒れた森だから人は来る！！？」という時代の大きなうねりの中に今我々は生きているのでは無いかと私は感じている。

きらめ樹体験会などで初めて森に来た方は、森に慣れていない人も多い。



森で一緒に汗を流すと初めて出会った者同士も自然と笑顔がこぼれだす。

会場を見て、「こんな斜面でやるの?!」と最初は所在無げに不安そうな様子を見せる方も少なくない。しかし、やり始めると、次第に夢中で真剣に、かつ笑顔になり、斜面をものともせず飽きる様子もなく間伐をする光景を毎回のように見かける。

終わってからみんなで自由な感想をシェアしあうと「楽しかった!」「またやりたい!!」を筆頭に「森の事を何も知らなかった」「自分達が出来る事もあるのだと知った」などの言葉を残し、みんな少し疲れた中でも素晴らしいきらきとした笑顔で帰っていく。私たちもその笑顔に疲れを癒される。

これは、いったい何が起きているのだろうか?参加者は森から何を感じ、受け取っているのだろうか?よくよく観察し、従来の固定観念にとらわれず継続して見ていきたいことでもあるが、今、私の中にあるキーワードを挙げるとすると、みなさんに共通しているのは「真剣な笑顔」だということである。

ただでさえ、「笑顔」は良いものだ。しかし、森仕事を一緒にやる人の笑顔には何か特別なものを感じる。それはもしかしたら、「汗して笑う」からこそその特別さなのかもしれない。知らず知らずの内に無我夢中で命と向き合う人たちの、「真剣な笑顔」だ。

あくまでも仮説であるが、「真剣な笑顔」は、その人その人が未来に本当に欲しい可能性や未来へのつながりに触れた時に、その人の中に出現するのではないだろうか。自然とのつながりと人の感情や気分とはずいぶんよく関係づけて語られるが、そのつながりというのをもう少し深く見ていくと、自然とのつながり＝自然と自分の循環＝自然と自分との分かち合い、のようなものを実行したりその可能性に触れたりした時に、力強くぶれる事のない「真剣な笑顔」が出現する。そして、それが今後の人と森の関係を大きく動かししていくキーとなるのでは、と感じている。

5. 素人木こりの可能性雑感

日本は、国土の7割もの可能性を秘めた森を有する、世界屈指の森の国。その森の4割をも占める人工林の中には放置された土地も非常に多く、林業従事者5万人程度で扱うにはあまりにも広大だ。私たち人間の歴史の中で、今ほど森や自然との直接的な繋がりを日々に体験しないで生きている時代はない。同時に、どこかその中で漠然とした違和感を持っている時代もまたない。この火山のマグマのようにエネルギーを蓄えた違和感とどう付き合っていくかが、この先の未来にどのような森と人との関係性や暮らしを創るかのポイントではないかと感じる。

新たな林業従事者を増やす活動も大事だが、もっと多くの市民が進んで森と分かち合うようになれば、崩壊寸前の日本の放置人工林は、物質的にも空間的にも精神的にも豊かな恵みをもたらす宝となりうるのではないかと。そのために今もっともレバレッジを掛けられるのは、冒頭で述べた、「分からない」という可能性である。言い換えれば、分からないという理由で盲目的に行動が止められている点こそが、知識を重視する世界観により知らず知らずに盲点になっている点であり、もっとも踏み出す価値が潜んでいるポイントである可能性は高いと感じる。ここに踏み出すには正義の仕事というより、勇氣の仕事と捉える心構えがいる。

環境問題、社会問題、と、問題としての見方も直視しつつも、自らにとって「新しい可能性」や「喜び」「楽しみ」としてこの現実を観る事が出来るかが、人々の今ココからの行動を左右する。ひいては、未来は行動の先に立ち現われるとしたら、未来を決め形作る今ココの世界の見方に新しいシフトをもたらし、喜びや



本来の森と同様にオープンな空間を意識した天空の森。来客との会議も「すごいですね。森ですね。」というところから会話が始まる。



社長との対話は必ずきらめ樹材の木の香りが溢れる会議室で。会議が終わっても社員がなかなか帰らないという。

楽しみ、可能性の器から未来をあふれさせることが、人と森が調和し持続可能な豊かな関係を創り出すための方向性と推進力の鍵となると信ずる。

豊かな原生林も、荒廃した放置人工林も、森は大きな可能性に満ちている。

もちろん様々な恵みや資源を我々人間にもたらし켜ける存在であると共に、癒す空間

間、論す空間としてもとても大きな価値がある。裸足で森を少し歩いてみるだけで、靴を履いていたら全く感じない五感からの情報に気付く。

今の多くの企業や学校、家庭での直面する課題も、森に来ると何か全く違ったパラダイムで観えるようになり、新しい可能性に触れ、新たなインスピレーションを持ち帰る事はとても多く体験する。

無垢のフローリングにして職員同士の距離が近くなった、というような感動の連鎖。木の持っている・森の持っている力を届けていく事、そしてその連鎖を引き起こしていく事が今の森や森林環境に大きな新しい力・うねりを生み出すカギになるのではないかな。

そのためにはそこに関わっている人が喜びや楽しみをベースに発信していく・コミュニケーションしていくことが今大切な事なのではないかな。問題や課題のための会話ではなく、可能性の会話を中心に多くの人たちとその可能性を分かち合う事が様々な人の関わりを引き込む事につながると思う。

仲間と一緒に森の中で開催している2泊3日のワークショップ、「森のリトリート[®]¹⁾」では、個人のみならず企業の幹部の方々もその価値を多く体験されている。また、2016年夏にドイツの森で開催した世界木こりフォー

1 「森のリトリート[®]」は、株式会社森へが提供するプログラム。日常から離れて森という持続可能性を備えた組織に触れながら、「森との対話」「人との対話」「自分との対話」という3つの対話を通じて深く内省して行くことで生まれる新たな自覚や洞察を得る。

ラムでは、森の中で、少人数での対話や、一人で過ごす時間等、ゆっくりと森と対話する時間を組み込み、話をした。すると非常に多くの参加者が、今抱えている課題に対して参加前とは全く違う思考の背景文脈を見つけ出し、突破につながるアイデアを持ち帰って行った。

これは何も新しい事ではなく、世界の各地で今も古来の生活風習を残す先住民族の中や、日本でも神社や山伏、またはマタギなどの生活の中では、当たり前前にされていたことだ。自然から授かる叡智とつながる場としての森は、もっとも人間にとって身近で奥深い自然なのかもしれない。

何年も暗い緑の砂漠と言われた暗い森も、光というレバレッジを入れてあげる事でダイナミックな変化を自然と始める。我々人間社会にも、社会を構成する一人一人の心の森に光を入れてあげると、イキイキとその人らしく生きる可能性を多分にもっている。森はそんな光を人の中の心の森に入れる不思議な力を持っていると感じる。2017年は、私たちが活動する森の所在地でもある八王子市の市制100周年にあたる。その記念事業として「きらめ樹間伐体験」を含む森での体験イベントを行政と一緒に取り組むことになった。また、企業研修会社の方々から森での研修プログラムの開発などなど、荒廃した放置人工林の中に新しい可能性を探る動きが生まれている。

それは、もしかしたら森だけの力でなく、自然な^{さま}様の力、つまりは人も自然なあるがままであれば人自体が光の役割を果たしていく。そんな連鎖を広く創り出していくことが、今ココからの未来の鍵になると感じる。

森林の問題は森の側にはない。人の心の森に鍵がある。人の心の森に光を入れるのに、荒れた森は一役買ってくれる。そんな事を日々感じ森の可能性を、今後も、固定観念や思い込みに捕らわれず、分からないことを止



沢山の素人仲間の力が100名を超える規模の間伐活動を可能にした。それ自体が大きな可能性だ。

まる理由にせず、むしろ「分からないは可能性」と思い、分からないまま、実践の中で感じ、信じ、体験の中から後で理^{ことわり}に気付く、こんな順序に光明を覩る。

〔参考文献〕

- C・オットー・シャーマー（2010）U理論、英治出版。
 ピーター・M・センゲ（2011）学習する組織、英治出版。
 大内正伸（2011）植えない森づくり、農山漁村文化協会。
 アダム・カヘン（2010）未来を変えるためにほんとうに必要な事、英治出版。
 枝廣淳子・小田理一郎（2010）システム思考教本、東洋経済。
 西口親雄（2012）森はナゾがいっぱい、ウズプレス。
 ジョセフ・ジャウオースキー（2013）源泉、英治出版。
 マーガレット・J・ウィートリー（2009）リーダーシップとニューサイエンス、英治出版。
 ジョセフ・ジャウオースキー（2007）シンクロニシティ、英治出版。
 村尾行一（2013）間違いだらけの日本林業—未来への教訓—、日本林業調査会。
 森と踊るホームページ (<http://www.moritoodoru.co.jp>)



三木 一弥（みき・かずや）

森と踊る株式会社 代表取締役。株式会社森へ。
 横浜国立大学大学院生産工学科修士課程修了。株式会社クボタにて上下水などの水処理施設のエンジニア、組織変革、新規事業開発を経験。2014年より独立し木こりとして、自然と人の調和した営みをテーマに活動。2016年2月、森と踊る株式会社を設立。関心事は森とトランスフォーメーション等。1969年生まれ。

